

# まちをオーガニックビレッジに 導いた有機農業のフロンティア

## 旧追分町に入植した小路健男さん「35年の軌跡」

1990年代初め、茨城県出身のひとりの青年が胆振管内の追分町（現安平町）に新規就農した。農場主の小路健男さんは、有畜複合経営の農場で研修に励んだ経験をもとに、米づくりと畑作、平飼い養鶏を軸にした経営を続けながら、有機農業の仲間を増やすための活動に奔走。自分の農園の一部を就農希望者の研修場所として提供する一方、「有機」に特化した道内初の専門農協の設立メンバーにもなった。還暦を過ぎた今、農園では後継者が育ち、新たに有機農業を始める人も増えた。そうした取り組みが周囲を動かし、安平町は一昨年、「オーガニックビレッジ」を宣言するに至る――。有機農業の普及と後進の育成に尽力してきた、その歩みをたどった。

（ルポライター・滝川 康治）



1991年に新規就農し、有機農業の普及・拡大に尽力してきた「無何有の郷農園」の小路健男さん。若手を育てるため研修生の受け入れにも努める（有機栽培の大豆畑で）



安平町の「道の駅」に設けた有機農産物の直売コーナー。安平と千歳の有機農家が出品する

公害に加担する生き方を選ばず  
有機農業の道ひとすじに歩んで

札幌から約50キロ、新千歳空港からは約17キロに位置する人口7300人ほどの安平町。その追分地区に広がる「無何有<sup>むかう</sup>の郷農園<sup>さか</sup>」が産声を上げてから35年ほどの歳月が流れた。

当初から有機農業に取り組み、今では16ヘクタールほどの農地で米と多品目の畑作物を生産する。有機農業を志す人たちの研修も積極的に受け入れ、地域ぐるみで有機農産物の生産から消費までを一貫して取り組んでおり、農林水産省が支援する「オーガニックビレッジ」に指定される原動力にもなってきた。

\*

農場主の小路健男さん（1964年、茨城県生まれ）は、工場下町のサラリーマン家庭で育った。宅地化や工場排水などで地域の自然環境が失われていく光景を目にする中で、「公害に加担するような生き方ばかりではないか。もっと人間らしい選択があるはずだ」と思った。

一次産業と関わりたいと考え、県内で唯一の水産高校に進学。在学中に北海道を訪れる機会があり、倉本

91年、合併前の追分町に土地を見つけて新規入植。農園の名前は、中国の莊子が唱えた「無何有（自然のありのままの姿）」にちなむ。

水田十平飼い養鶏＋畑作・野菜づくりが当初の営農スタイルで、若者の研修も受け入れてきた。妻の恵子さん（71年、美唄市生まれ）とは、就農から3年目の時に北海道教育大岩見沢校のゼミ生として来園したことがきっかけで結婚。現在21歳〜30歳までの3男2女がいる。

聴脚本の「北の国から」もよく観た。

そんな小路さんは、大地に根を下ろし自分で食べものを作るために北海道で酪農をしようと考え、酪農学園大の農業経済学科に進む。実習などで学ぶものは多かったが、大規模化を追い求める酪農家が多額の借金を抱え、決められた乳価の下で働かざるを得ない現実を知り、「これが自分のやりたい農業だろうか」と思った。そんな中で、みずからの生い立ちを振り返り、環境負荷を低減できる有機農業を志向するようになっていく。

大学卒業後は、茨城にある「たまごの会八郷農場」で3年間の研修生活を送った。この農場は有畜複合で多様な農業を営んでおり、有機農業の運動論も学んだ。

北海道に戻り、89年から翌年にかけて「札幌の50キロ圏内で、近くに海や山、川があり、水田が作れて鶏が飼える場所」を探して、就農できそうな町をまわる。

「なんのつてもなく飛び込みで土地を探し歩いたのですが、当時は独身まず相手（農業関係者）に信用してもらうためにはどうするか――その手練手管を身につけましたね」

小路さんの農地は、水田40アールと畑15・5ヘクタール（一部は就農予定者に貸与）。大豆や小麦、ニンジン、ゴボウ、長イモ、カボチャ、大根などをバランスよく栽培する。

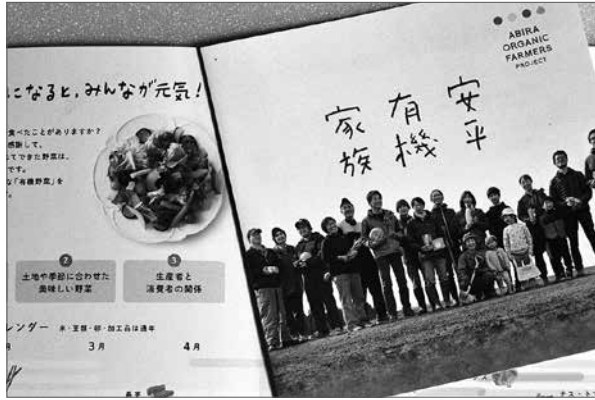
有機農協設立に加わり組合長に若手の研修も積極的に受け入れ

就農を果たした小路さんは、有機JAS認証制度の創設から間もない2001年に「無何有の郷」の全農地の認証を取得し、北海道有機農協の設立にも携わった。05年には同農協の代表理事組合長に就任し、現在7期目。今では本道の有機農業にとって欠かせない存在になっている。生産者が自前の流通組織を持つことで、販路の拡大や品質の向上、消費者との協同などを進めることをめざしてきた、有機農協の正組合員数は現在62人。このうち42人が新規就農者で占める。

そうしたこともあって、「無何有の郷」では、有機を志す若手に対する就農支援に注力してきた。受け入れまでの流れはこうなっている。

① 農業が「農的暮らし」か、家族間の温度差などについて就農相談  
② 本人のイメージする営農類型が





有機農業推進協が発行した案内パンフ『安平有機家族』

水産省も持続可能な農業を推進する一環として、21年に「みどりの食料システム戦略」の策定に至った。みどり戦略では、国内の耕地面積に占める有機栽培の割合を、50年に25%へ拡大する数値目標を掲げる。面積の拡大に向けて農水省は、地域ぐるみで生産から消費まで一貫して取り組む「オーガニックビレッジ」を、今年中に100市町村、30年までに200市町村創出するとの目標を掲げ、産地づくりを推進中。昨年12月までに45道府県131市町村で取り組みが始まり、道内では安平町と旭川市が実施している。



「無何有の郷農園」では、小面積の水田+畑作物と多品目の野菜を生産する

国や自治体の支援事業に乗るか確認  
③ 研修内容と本気度の確認  
④ 研修受け入れ後の行政手続き  
⑤ 住宅や学校などの手続きを経て、次年度からの研修スタート  
研修1年目は、年間の作業と座学を組み合わせて行なう一方、地域との付き合い方や考え方も伝える。2年目にはこれに週3日、30アールの「実践農地」での学習を加える。「僕が就農して数年後に経営の方向が見えたところから研修を受け入れて

きました。結婚する前から大学のゼミ生を呼んだり、うちの卵のお客さんに『皆で田植えをやりましょう』と声をかけたり……。有機の畑を増やし、まず地元から変えていこうと戦略的に考えてきた。研修生には、『できるだけJAにも加入しなさい』と勧めます。資金対応や資材の購入などで活用することで経営的にも成り立ち、地域と上手くやっていける」と小路さんが強調する。

8年間で有機の仲間が倍増して安平町も「オーガニック宣言」へ  
「有機農業への参入・定着の推進」を掲げる北海道からの働きかけを受け、17年に有機農家6戸12人が集い、「安平町有機農業推進協議会」を設立した。新規参入者の育成・相談をはじめ、研修の受け入れと技術指導、パンプ類の作成や視察、道の駅「あびらD51ステーション」への直販コーナー設置、関係イベントなどの活動を展開中。現在の会員数は10戸19人

になり、26年度はさらに1戸増える予定だ。  
「安平では（新規参入者が就農できる）農地は余っていないから、地元の方が『あいつならば大丈夫だ』と行ってサポートしないと土地は動きません。だから、うちで研修する場合も、協議会の活動として取り組む形にすることで、町や道に有機の就農希望者をより受け入れてもらうようにしています」（小路さん）

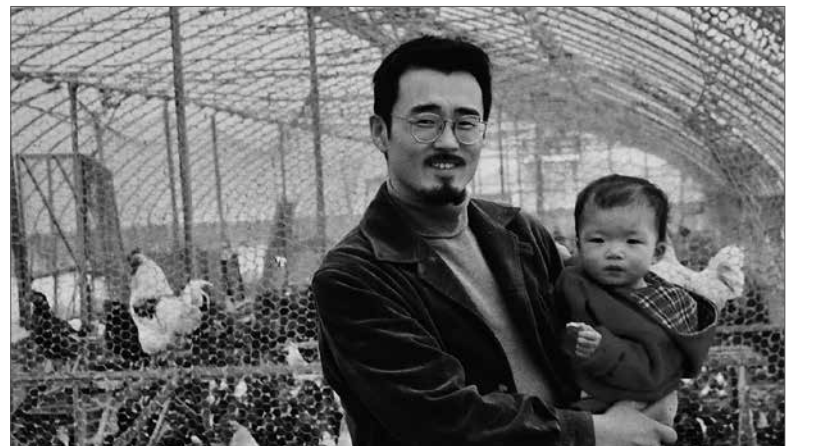
有機農業を志して研修するのは、30代半ばころの真面目で確固とした問題意識を持つ人が多い。慣行栽培から有機認証を取得するには3年間の転換期間が必要になるため、小路さんが提供する農地を使つて1年目をクリアした上で、就農後の2年を転換期間とするケースもあるという。

また、有機農業を目指す人の中には小面積での就農を求める傾向が強いが、小路さんの農場で畑作+野菜づくりを体得してもらうことで、比較的規模の大きな営農スタイルにも臨機応変に対応できる——そうしたことに心を配りながら、有機農業の仲間を増やしてきた。

自分の農場での研修受け入れを推進協議会の活動に結びつけ、有機農小路さんも、すでに還暦を過ぎた。「いつまでも出しゃばらず、（さまざま活動は）65歳ころに一段落して、自分の足場である農業の世界で生き続けていきたい」

と語る。農場経営は、65歳の時点で3男の森生さん（98年生まれ）に移譲し、自身は助言役に回るつもりだ。また、今年で7期が終わる有機農協の代表理事についても、若手が育っていることから辞任する意向という。「この15年間ほど持続可能な農協にするため模索してきたけれど、なかなか上手くいかなくて、役員もボランティアに毛が生えた程度でした。これからは、年間4億円余りの売上高を10億円まで伸ばす方向が確認され、目標に向けてバトンタッチする環境ができてきました。大規模な有機栽培の受け皿にもなっていく必要があります」

と、国内では数少ない有機の専門農協の今後の見通しを語る。  
ずっと、有機農業のすそ野を広げる活動家としてのライフスタイルを貫いてきたが、今後は地元の有機仲間で作る協議会の取り組みなどに注力していくつもりだ。  
「新規就農者を増やすだけでなく、



平飼い養鶏をやっていたころの小路さん（2003年3月撮影）

業のすそ野を広げようとする、なかなかの戦略家といえる。筆者は、本誌の取材がきっかけで20年余り前に小路さんと知り合ったが、後進の育成に尽力する姿に共鳴している。  
若手の有機農業者が多く存在することでは、安平は道内でも有数の町ではないだろうか。

有機農業は一昔前までは少数派の「勇気農業」だったが、2000年代に入ると道が推進方針に転じ、農林



設立から間もないころの北海道有機農協の総会（03年3月）

既存の農家が有機に転換していかなければ、『オーガニックビレッジ宣言』の目標は達成できません。そうした仲間を増やし、地元のJAも参入してもらおうと考えています」

この地に新規就農して30年余り、小路さんの挑戦が続く。

■無何有の郷農園  
安平町追分旭834  
☎0145・255・2545  
yu-kinokyo.net/mukaunosato-farm/